

| | |
|--------------|---|
| Title | 親縁性と非感性的類似性 : ベンヤミン言語論の読解 |
| Author(s) | 河口, 篤 |
| Citation | 待兼山論叢. 芸術篇. 2016, 50, p. 65-97 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/70044 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

親縁性と非感性的類似性

——ベンヤミン言語論の読解——

河 口 篤

キーワード：ヴァルター・ベンヤミン／言語論／親縁性／非感性的類似性

序

ベンヤミンの言語についての思想は「言語一般および人間の言語について *Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen*」(1919)、『翻訳者の使命 *Die Aufgabe des Übersetzers*」(1921)などの初期言語論と、『模倣の能力について *Über das mimetische Vermögen*」(1933)、『類似するものの教説 *Lehre vom Ähnlichen*」(1933)、『言語社会学の諸問題 *Probleme der Sprachsoziologie*」(1936)等の後期言語論に分けられるが、それらの間の連続性は時折問題となる。本稿では、『翻訳者の使命』と『類似するものの教説』および『模倣の能力について』の中で、それぞれ同じものを述べているように見える「親縁性 *Verwandtschaft*」と「非感性的類似性 *unsinnliche Ähnlichkeit*」について、その異同と、用語の変遷の理由を考察する。初期言語論において親縁性が議論されている箇所では、親縁性は類似性

とはつきりと区別されている。それに対して、後期言語論では非感性的類似性という概念によって、類似性の概念の下に包摂されるものとなっている。これについて、本稿の問いは以下の三つにまとめられる。この親縁性と非感性的類似性は同一のものともみなせるのかどうか。もし違いがあるとすれば、それは（特に類似性の概念に関して）どのような違いがあるのか。そしてその違いは、ベンヤミンの言語および認識を巡る思索の中で、どのような必然性が、あるいは意義があったのか。最後の問いについては、ここでは不十分にしか言及されえないが、これらの問いに応えるために、本稿ではこの二つの概念を、幾つかのテキストの中で追っていくこととする。最初に二つの概念が同一と思われる根拠となるテキストを提示する（一章）、次いで「翻訳者の使命」における親縁性の用法を確認し、また類似性と親縁性の区別についてより詳しく調べるために「類比性と親縁性 *Analogie und Verwandtschaft*」というテキストを参照する（二章）。そして親縁性の概念は「言語一般および人間の言語について」での親縁の語の使用に由来すると思われるので、その意味を確認する（三章）。その後、「類似するものの教説」における非感性的類似性の概念について、初期言語論での親縁性の概念と比較しつつ確認し、またこの非感性的類似性の認識可能性についても僅かながら考察する（四章）。結論として、親縁性と非感性的類似性はほとんど同じものでありながら、後者は少なくとも表面上は脱神学化がなされており、前者には持ちえなかった認識論的な射程を獲得していると示唆すること、本稿を閉じることにする。

第一章 二つの似た議論

はじめに、「翻訳者の使命」で現れる親縁性についての、次いで「類似するものの教説」での非感性的類似性に

ついで、ほとんど同じような議論について、提示しておく。先ずは「翻訳者の使命」から、二つの文を引用する。

諸言語の最も内的な関係は、ある特有の収斂である。この関係は、諸言語は互いに疎遠のではなく、アプリアに、あらゆる歴史的な関係性を離れて、それらが言おうとしていることにおいて、互いに親縁 (verwandt) である、ということに存している。(IV-1:12)⁽¹⁾

諸言語のあらゆる歴史を超えた親縁性は、全体をなしている言語としてのそれぞれの言語において、そのつど一つの、つまり同一のものが意図されている、ということに基づいているのだが、それにもかかわらずその同一のものは、それら個々の言語の内どの言語でもなく、ただ諸言語の相互に補完し合う志向の総体、すなわち純粋言語 (die reine Sprache) によつてのみ達しうる。(13)

ここでは、同じものを志向する言語は、そのことによって、相互に歴史を超えた親縁性を持っている、と述べられている。この歴史を超えた、というのは、血統的な親縁性、すなわち、同一の歴史的起源を持つと言う意味での親縁性 (血縁関係) に基づいているのではない、という事を表わしている。⁽²⁾ 親縁性はあくまで、諸言語が同一のものを志向しているというところに現われるのである。

これに対して、「類似するものの教説」の中では、(非感性的) 類似性について以下のように述べられている。

同じものを意味する、さまざまな言語の言葉を、その中心としてのあの意味されるものの周りに並べてみれば、

それら全て——お互いにはしばしば全く類似性を持っていない——はそれらの「言葉の」中心におけるあの意味されるものに類似している、ということが明らかにされうるだろう。(H-1:207, □内は訳者。以下同様。)

ここでは単語のレベルでいくつかの相違が認められるが、意味上の相違はあまりないと言える。⁽³⁾先ほどの親縁性の語と同じように、類似性(後に説明するが、これはほぼ非感性的類似性として読み替えられる)もまた諸言語が同じものを意味している(意図している)という関係性の内に見出される。当然ながらここには歴史的な親縁性といった要素は見当たらず、先ほどの親縁性の語の範疇にびったりと重なっているように見える。⁽⁴⁾

この二つの概念の関係はどうなっているのだろうか。そのためには前提としてそれぞれの概念を正確に把握しなければならぬ。まずは親縁性の概念について「翻訳者の使命」の内容を、本稿に関連する範囲内で再構成しながら確認していく。

第二章 「翻訳者の使命」における親縁性

第一節 翻訳可能性

「翻訳者の使命」は、芸術作品についての見解を述べるところから始まっている。それによると、芸術は人間一般の存在と本質を前提としてはいるが、しかしその芸術作品は人間に向けられているものではなく、それゆえ、芸術作品や芸術形式について考察する時に、受容者を考慮することは無意味なのだという。このように考える時、翻訳の意義というものは、原作を(その言語のために)理解しない読者のために、その内容を伝達することにある、とする

考え方が否定される。そしてまた、原作において伝達の範疇の外にあるもの、その本質的なもの、つまり（詩的なもの）を、翻訳者みずからもが詩作することによって、不完全に再現しようとする翻訳もまた、否定される。というのも、この後者の翻訳もまた、翻訳の読者にそれを伝達しようとするからであり、これは原作が伝達を目的としなかったことに対応しないのだ。これら二つの翻訳についての考え方は、翻訳を原作よりも劣ったものとする根拠ともなっている。だがベンヤミンはそれに反して、翻訳にはその独自の意義があるのだと主張する。

ベンヤミンは翻訳をひとつの形式として定義するが、それについて考察するのに翻訳可能性というものを問題にする。⁽⁵⁾この翻訳可能性は原作に内在するものであり、そこには二重の意味がある。一つは、理想的な翻訳者が現われるかどうかということ。もう一つは、その作品は翻訳を許容するのか、従って、翻訳を要求するのかということである。この後者の翻訳可能性（許容、要求、可能性と様々な言い方がなされるが、どれも同じことをさしている）について、その意味をベンヤミンは次のように述べる。

ある種の関係概念は、それらをはじめから専ら人間にだけ関係づけられるのではない場合に、その良き意味を、おそらくはその最良の意味を保持する。(W-1:10)

これは先ほどの、原作や翻訳が人間に向けられたものではない、ということの繰り返しでもある。だがここでベンヤミンは、このある種の関係概念を、人間でないものに関連づけることを指示する。すなわち、神の領域である。

だからこそ、ある忘れがたい生ないし瞬間は、全ての人々がそれを忘れてしまっている場合でさえも、語られ

うるのだ。すなわち、その「忘れがたい生ないし瞬間の」本質が、忘れられないようにと要請しているのであれば、あの賓辞は何らの偽りも含むこと無く、人間には応えられないある要請を、同時におそらくはある領域、そこにおいてはその要請に応えうるような領域、すなわち神の記憶、への参照指示をも含むことになるだろう。

(10)

忘れないように、という要請は必ずしも人間によって応えられるものではない。同様にして、翻訳の要請もまた、必ずしも人間によって応えられるものではない。このような思考によって、原作は理想的な翻訳者を見つけられるかどうか、という問いとは別のものとして、原作は翻訳を要請しているか、という問いが立てられうることになる。そしてここでは同時に、翻訳の要請が、神学的な背景なしには考えられないことが示唆されている。

それでは、この翻訳の要請は、どのような領域を指示しているのだろうか。

翻訳は結局、諸言語の相互の最も内的な関係の表出について合目的である。(12)

つまり翻訳は、究極的にはこの諸言語の相互の最も内的な関係を表出することを要請している訳である。ではその関係とは何なのか。それが「親縁性 *Verwandschaft*」である。

諸言語の最も内的な関係は、ある特有の収斂である。この関係は、諸言語は互いに疎遠のではなく、アプリアに、あらゆる歴史的な関係性を離れて、それらが言おうとしていることにおいて、互いに親縁 (*verwandt*)

である、ということに存している。(12)

翻訳は諸言語間の親縁性を(明示的ではないにせよ)示すために行われるのである。しかしそれはどのような形で可能なのであろうか。ここにおいて、親縁性の意味合いがより詳細に語られる。

翻訳において諸言語の親縁性が現われるとすると、それは模作と原作との漠然とした類似性(Ähnlichkeit)によつてでは無い。親縁性(「血縁関係」)のあるところに必然的に類似性が現われて来るというわけではない、ということが、一般に明らかであるように。そしてまた、この連関における親縁性の概念は、「諸言語間および血縁関係間の」どちらの場合も、起源(「血統」)の同一性によつては十分に定義され得ないという点で、もちろん起源概念はあらゆる狭義の用法の規定に不可欠であり続けるだろうが、それにもかかわらずその狭義の用法において一致する。——二つの言語間の親縁性は、その歴史的親縁性を度外視するとすれば、どこに探し求められるのだろうか。詩作(Dichtungen)の類似性の中にでも、おそらくは同様にその言葉の類似性の中にでもない。むしろ、諸言語のあらゆる歴史を超えた親縁性は、全体をなしている言語としてのそれぞれの言語において、そのつど一つの、つまり同一のものが意図されている、ということに基づいているのだが、それにもかかわらずその同一のものは、それら個々の言語の内のどの言語でもなく、ただ諸言語の相互に補完し合う志向(Intentionen)の総体、すなわち純粹言語(die reine Sprache)によつてのみ達しうる。(13)

ここでははっきりと、類似性と親縁性が区別されている。血縁関係があるからと言って、必ずしも類似性がある訳

ではない、という例は容易に理解できる。従つて、親縁性があるからと言つて、類似性が見いだされるわけではなく、つまりは類似性によつて親縁性を表出することはできないということになる。例えば詩作 (Dichtung) の類似性⁽⁶⁾——これはつまり、原作における (詩的なもの) の構成 (詩作) と、翻訳における、翻訳者もまた詩作することによる、その (不完全な) 再現との間の類似性だと考えられる——、あるいは言葉の類似性——これは特に音や表記上での類似性だと考えられる——に親縁性を求めることもまた否定される。ではどこに親縁性が見いだされるのかというと、それは先ほど述べた特有の収斂の関係、つまり同一のものが志向されているという関係の内に、である。そしてその同一のもの、あるいは、その同一のものに達しうるものが純粹言語と呼ばれている。

忘れがたいものが神の記憶の領域と関連付けられていたことを思えば、この純粹言語は神の言語と言ひ換へることも出来るだろう。神の言語が、諸言語の親縁性を保証しているのであり、この神の言語の内において、諸々の言語は親縁性を持つのである。

ところで互いに補完し合う志向、という表現が見られるが、これがどういうことを意味しているのか、ということについても確認しておこう。ベンヤミンはそこで、志向 (Intention) において、「意図されるもの das Gemeint」⁽⁷⁾と「意図する仕方 die Art des Meinens」とを区別しなければならぬと言ふ。そして「パン」のフランス語と「Brot」(「パン」のドイツ語)とどう二つの語を例示する。この二つの語は同じもの、つまり「パン」を意図しているが、しかし互いに異なる意図する仕方を持っており、フランス人とドイツ人にとって、その意味するものは交換不可能で、互いに排除し合いさえする。このようにこれらの二つの語においては意図する仕方は互いに敵対し合うのだが、しかしこれら二つの語が属する二つの言語においては補完されるのだという。このことはおそらく以下のように考えられる。フランス語が「Brot」を「pain」と翻訳することによつて、その意図する仕方を獲得したとする(そ

の時には普通△pain▽が意味してはいないようなパンが、例えばBrezelが新たに意味されるようになる。読者がそれを理解するかどうかは別として。その時、その翻訳における△pain▽はもはや元のフランス語の△pain▽ではなく△Brot▽をも包括するような仕方です。「パン」を意図している。この時、このフランス語の△pain▽は△Brot▽によって補充され、「パン」(全ての「パン」)を十全に言い現わすあの言語(つまり純粹言語)に、より一歩近づいている。⁽⁸⁾

さて「翻訳者の使命」には他に「芸術作品の生」という概念や、翻訳の「忠実」と「自由」についての興味深い議論があるが、本稿の主眼はあくまで親縁性の概念であり、これ以降は親縁性の語も現れないので、「翻訳者の使命」の検討はここまでにしておこう。

第二節 類似性と親縁性

親縁性、類似性の関係に関連するものとして、「翻訳者の使命」の二年前に書かれた「類似性と親縁性 *Analogie und Verwandtschaft*」というテクストがある。親縁性と類似性との関係についての初期のベンヤミンの思考をより詳しく辿るために、これも参照しておこう。

この論文には前書きがあり、ここでは類似性と親縁性の区別について語られているが、それによると、類似性は隠喩的な「関係の類似性」であり、本来の意味での類似性は「実体 (Substanz) の類似性」であるのだ⁽⁹⁾。類似性、類似性、親縁性の関係については以下の記述が最も明確である。

類似性からも類似性からも親縁性は十分には推論され得ない。ただし場合によっては類似性が親縁性を予告できるとの対し、類似性においてはそれは決して起こらない。(VI:43)

興味深いのは、ここでは類似性が親縁性を予告できる場合があるとされている点である。これは「翻訳者の使命」において血縁関係の例を挙げながら、類似性が親縁性を示すわけではないと述べていることと矛盾するようにも思える。だがこのテキストでもまた、血縁関係における親縁性について語られている。

類比性はどのような場合にも親縁性を根拠づけはしない。そのため、子供は彼らが両親に類似しているということによって、両親と親縁なのではなく「類比性と類似性の区別が欠けている」、またその類似性においてもない。(43)

ここではベンヤミン自身が書き込んでいるように、類比性と類似性の区別が曖昧ではある。この類比性と類似性の区別、特に先に述べた、類似性が親縁性を予告し得るような場合については後に触れるとして、類似性が親縁性を根拠づけはしないという議論は「翻訳者の使命」でのものと全く同様である。またベンヤミンは親族間の親縁性について、それは因果関係によっても説明されないと言う。ここでの因果関係というのは、母が子を産んだ、父がその子を孕ませた、ということを言うのであるが、これは起源の同一性のことでもあろう。親縁性は寧ろ夫婦間に、そして親子間に、その類似性や因果関係とは別のものとしてあるのだと言う。

そうではなくて親縁性は、分割されることなくその全本質に関係している、何らかの特別な表現 (Ausdruck) を求めることなしに「親縁性の表現なきもの Ausdruckloses der Verwandtschaft」。(43)

「ここでの親縁性が表現を持たない」ということの指摘は重要である。表現を持たないということは、「翻訳者の使命」での議論において、親縁性が翻訳においては決して明示的にされることがないことにも対応している。純粹言語は、「言語一般および人間の言語について」を踏まえるなら「最も語られてあるもの」ではあるのだが、純粹言語の内に、あるいは純粹言語と諸言語の間に存在している親縁性という関係は、決して語られることがない。それは説明され得ず、言わばただ啓示されるのである。つまり親縁性の認識可能性はかなり限定されている。「親縁性の本質は謎めいている」(43)のだ。

このことは類比性と親縁性の対比として、合理性と感情が例示されていることにも表れている。類比性は冷徹な観察によって、感情抜きに捉えられるものである。「類比性はある学問的な、合理的 (rational) な原理である」(44)。そこに感情の入り込む余地はない。然るに、類比性の限界が策定される。

父と子は親縁である、これは理性 (ratio) において本質的に規定することのできない関係である、理性によって理解され得るものではあるにしても。(44)

一方で、親縁性においては寧ろ感情の出番がある。

類比性と親縁性の取り違えは、全くの倒錯である。この取り違えは、類比性が親縁性の原理と、あるいは親縁性が類比性の原理と見なされている点に存する。(44)

ベンヤミンはこの前者の取り違え、すなわち、類比性を親縁性の原理と見なす取り違えの例として、音楽を聴いて風景、出来事、詩を思い描くということを挙げている。

音楽から類比するものへの移行は不可能であり、音楽はただ親縁性だけを認める。そして音楽に親縁であるものが純粹な感情なのであり、その純粹な感情は認識可能であり、またその純粹な感情において、音楽は認識可能なのである。(44)

ここでの感情における認識というのは、説明はできないが音楽が「分かる」という経験を表わしているのだと考えられる。

ところで私はこの個所で、クロード・ドビュシー (Claude Debussy, 1862-1918) の『海 La Mer』(1905) を思い浮かべてしまう。⁽¹⁰⁾ドビュシーはこの作品を、海から離れたブルゴーニュ地方のある村で、海についての「数え切れない想い出」をもとにして書き始めた。さらに、現実の海は想像力の邪魔になりかねないとも語っている。つまりこの作品は単純な「海の描写」ではない。もつとも、ここでは明確に類比性が排されている訳でもない。特に第一曲に顕著であるが、類型的な「波」の表現も見られるし、いくつかの箇所では聴きながら海の姿をイメージせずにはいられない。素描 (esquisses) と題され、各曲にも具体的な表題がついているのだから、類比的なイメージを抱かずに聴く方が難しいとも言える。

初演後、多くの論者が「海の描写性」が不十分だと指摘したことは、まさに音楽を類比性によって理解しようとする態度であろう。だがその批評にドビュシー本人が困惑したように、彼はあくまで想い出と想像を音楽化したの

であって、現実の海を描いたのではない。この作品は「自然のうちにある、『眼に見えないもの』の、感情を通じての転写⁽¹¹⁾」なのだ。後の箇所ではベンヤミンは「花」と「苦惱」との親縁性を述べているが (VI: 45) 、ここにるのは「海」と「音楽」ないし(海のイメージに対して持つ)「感情」との親縁性だと考えられるだろう。

ベンヤミンのテクストに戻ろう。以下の文章では、類似性と親縁性の関係、および親縁性と感情の関係について、よりはっきりと語られている。

類似するものが親縁性を作り出すのではない。類似するものは、ただそれが類比性を超えて出ていることが明らかにされるような所のみ——最終的にそのことは至る所で明らかにされるだろうが——親縁性を予告するものでありえ、そしてその親縁性の予告は、(直観 (Anschauung) においてでもなく理性においてでもなく) ただ感情においてのみ、直接に (unmittelbar) 聞き取られうるものであり、理性においてはしかし厳格にそして控え目に、理解することが許されている。(45)

先ほどから何度か言及されていた、類似性が親縁性を示す場合がここで言及される。結局のところ、類似性と類比性の区別が完全になされるならば、類似性は親縁性を予告しうる、ということである。この時点で既に、ベンヤミンにとって類似性の概念の明確化が課題となっていたことが伺える。そして親縁性に関しては、感情による聞き取り (vernehmen) ということが述べられている。ベンヤミンの言葉に反してこれを理解することは困難ではあるが、重要なのは、これがある種の特別な認識の形態であることである。この感情だとか、聞き取りだとか言う言葉は後に使われなくなる⁽¹²⁾。しかしこれらの記述から、親縁性の概念の明確化が、重要な課題としてあったのだということが分

かるだろう。

さてここまで述べてきた親縁性は、しかしその由来はどこにあるのだろうか。そのことを明確にするために、次章では「言語一般および人間の言語について」を検討する。

第三章 「言語一般および人間の言語について」における親縁性

第一節 言語の位置

1916年に執筆され、生前に公表される事なかった「言語一般および人間の言語について」（以下「言語一般」）では、言語のみならず、歴史哲学、認識論に関する彼独自のいくらか神秘主義的な思想が展開されている。ここでは特に言語の位置付けに注目しながら、論を追っていく。

ベンヤミンは言語（一般）を、通常考えられているような人間が用いる音声記号（あるいは文字）としてではなく、精神的内容（本質）を伝達するような表現一般に拡張して考えている。そうすると、あらゆるものに、その言語を想定することが出来る。

生物界であれ、非生物界であれ、何らかの仕方において言語に関与していない出来事や事物は存在しない、それというのも全てのものにとって、その精神的内容を伝達することは本質的なことだからである（II-1: 140-141）。

そのように捉えたとき、言語はもはや何かを伝えるための手段ではない。

言語は自らに相応する精神的本質を伝達する。この精神的本質は自己を言語において、(E) 伝達するのであつて、言語によつて (durch) ではなく。(142)

言語が何かを伝達するための手段であるならば、事物は言語によつて伝達することになるが、そうではなく、事物は言語において自らの精神的本質を伝達するのである。このようにして伝達されるもの、あるいは伝達可能なもの (精神的本質) が言語的本質と呼ばれる。⁽¹³⁾

ではこのような伝達によつて、事物は何を伝達するのか。「どの言語も自己自身を伝達する」(142)。これは事物それ自身が言語において伝達されているのではなく、事物の言語がその言語において伝達されているのである。つまり (同語反復だが明確にするために繰り返し返しておく)、言語が伝達するのは言語それ自身なのである。「どの言語も自己自身において自己を伝達するのであり、言語はすべて、最も純粹な意味で伝達の (媒質 Medium) なのだ」(142)。⁽¹⁴⁾

そのようにして事物の言語的本質 (再度述べると、その精神的本質にあつて伝達可能なもの) は、事物の言語そのものものことになる。では人間の場合にはどうなるのかというと、「人間の言語的本質とは、人間の言語である」(143)。しかし人間の場合には、事物と異なり、人間は言葉において語るものであつて、それゆえに、「人間はあらゆる他の事物を名づけることによつて、自身の精神的本質を (それが伝達可能な限りにおいて) 伝達する」(143)。そして「人間の言語的本質はそれゆえ、人間が事物を名づけることである」(143) とされる。

ここではベンヤミンは「何のために名づけるのか、誰に人間は自己を伝達するのか」(143)と問いかける。というのも、事物の言語と人間の言語ではその伝達対象が異なるからである。あらゆる事物、ランプ、山々、狐といったものは、自己自身を人間に伝達する。人間はそのことによつて、それらを名づけることができる。だがそれらを名づけることによつて、人間は誰に自己を伝達しているのだろうか。伝達というものが、言語においてなされる以上、それは言語によつて伝達する、人間に対する伝達とは区別される。やや突飛ながら、ベンヤミンはこう結論する。「名において人間の精神的本質は自己を神に伝達する」(144)。

神へ伝達する、ということの意味合いを理解することは難しいが、少なくともこの名づけは、神学的な背景の下で、人間の課題とされている。

第二節 名づけⅡ翻訳、それを可能にするものとしての親縁性

だがこの名づけとは何なのか。ベンヤミンはそれを「事物の言語の人間の言語への翻訳である」(150)と言う。これを理解するために「言語一般」における翻訳の概念について検討しておこう。そこでの翻訳は通常の翻訳概念とは全く異なる。だが一方で、「翻訳者の使命」で述べられた翻訳概念と近いものでもある。

先ほど述べたように、ベンヤミンは言語を媒質だとした。言語が媒質であるとすると、諸言語(人間の言語に限らず言語一般の諸言語)の差異は、「いわばそれぞれの密度によつて段階的に区別される媒質」(146)の差異であることになり、それゆえ「諸言語相互の翻訳可能性が与えられている」(151)ことになる。つまりところ「翻訳とは、一つの変換の連続体による(durch)ある言語から他の言語への移行(Uberführung)である。抽象的な合同領域や類似領域(Ähnlichkeitsbezirke)などではなく、この変換の諸連続体を、翻訳は踏破する」(151)。

ここでも類似性は否定的に捉えられているが、同時に諸言語の間の独特の説明し難い関係性を言い現わしてもいい。ベンヤミンはここでもう一度、名づけに戻って以下のように述べる。

事物の言語の人間の言語への翻訳は、沈黙するものの音声を持つものへの翻訳だけではなく、名なきものへの翻訳でもある。つまり、それゆえに、ある不完全な言語のより完全な言語への翻訳でもあり、その翻訳は何かを付け加えないわけにはいかない、つまり認識を。(151)

名づけという翻訳は、その言語に認識を付け加える。これが意味しているのは、人間の名づけは人間の認識に基づくということであり、その反映であるという事である。これは一見すると人間による恣意的な名づけが、つまり記号としての、手段としての言語が可能になってしまいうように思われる。だがこの名づけは翻訳でもあったことを思い出さなければならない。ベンヤミンはここで直接触れてはいないが、諸言語間の翻訳もここではその一種として想定できる。そのような翻訳において恣意性が制限されることは容易に理解できるだろう。しかしそれでは、この名づけ＝翻訳の正当性(客観性)は何によって保証されるのだろうか。

この翻訳の客観性は、しかし「ただ」神のうちにおいて保証されている。(151)

これは後に「翻訳者の使命」において、純粹言語が、そして親縁性が、翻訳可能性を保証していたことに対応するだろう。「翻訳者の使命」で述べられていたのと同様に「言語一般」での議論においても、現在の(墮罪後の)人間

の言語には完全な翻訳は不可能であるとされている。だがそれでも、少なくとも事物の中には神による名が秘められているはずであるから、人間の名づけはその完全な言語（神の言葉）への予感を孕んだものでありうる。

やや先走ってしまったが、この神の言葉と人間の言語との関係を確認しよう。そこに親縁の語も現れるのである。

「言語一般」のなかでベンヤミンは『創世記』を参照しながら、言語の意味を考察している。名づける言語というのは、神の創造する言葉の名残であり、人間に与えられた認識の力である（それは神の創造を成就するものでもある）。というのも、神は事物を創造し、名づけたのであり、この名づけを人間は受け継いでいるからである。「人がすべて生き物に与える名は、その名となるのであった」（『創世記』二一・19）。そしてこの翻訳、すなわち人間による命名は、人間の（名の）言語と、事物の名なき言語とが神のうちにおいて親縁であることに、すなわちその親縁性に基づいているのだと言う。

人間の名言語 (Namensprache) と事物の名なき言語とが神のうちにおいて親縁 (verwandt) ではないのだとしたら、「……」、「事物を名づける」という、人間の「課題は解きえないだろう。(151)

実は言語一般で親縁という語が現われるのは今の箇所と、最後の方で「歌声の、鳥たちの言語との親縁性」(156)と述べられる箇所だけである。これは自然の言語の、芸術の言語への翻訳の一例である。芸術創造は名づけ＝翻訳の一種であるが、芸術の言語は名言語よりは下位のもの、つまり神の言葉から遠いものと見なされている。これら二つの用法に親縁性の起源がはっきりと表れている。つまりこの親縁性が人間の名づけを、つまりは翻訳を可能にしているものなのであり、また翻訳される諸言語の間に見出される関係性でもあるのだ（「言語一般」においては明言され

ていないが、人間の諸言語の間にも見出されるものとして)。しかしその親縁性はあくまで神の内におけるものであり、楽園から追放された人間にとつて常に手元にあるものではない。それだけに、その認識の方法が問題となりうる。つまり、我々はいかにして名づける \parallel 翻訳するのか。

それは啓示(すなわち、直接の \parallel 無媒介的な認識)でもあることだろう。つまり、神の恩寵による開示である。だがこれだけでは名および親縁性の認識可能性はあまりにも限定されている。だからこそその認識への試みが「類似性と親縁性」で述べられていた音楽と感情との関係だとか、「絵画について、またはツアイヒェンとマール *Über die Malerei oder Zeichen und Mal* (GS, Bd. II-2: 603)」(1917)でのマールとコンポジション(において示される言葉)との関係についての議論といった形でなされたのだろう。前者は直接の、説明不能な認識であり、言わば感情における啓示であろう。後者では、マール \parallel 絵画的言語という媒質の中に、マールと親縁な「言葉」がコンポジションにおいて入り込み、自らを啓示することで絵が名づけられるとされている。ここでも啓示であるが、コンポジションにおいて、ということ在具体性を増している。そして「翻訳者の使命」においては、親縁性を明らかにするという課題は(人間の諸言語間の)翻訳に託されていたのだが、同時に、同じものを意味する諸言語の間の関係、という説明も与えられていた。つまりあの説明は、親縁性を説明するものであるのと同時に、(翻訳と共に)親縁性を認識するための一つの方法の提示でもあったのだ。

そうすると、それと同じ説明を持つ非感性的類似性の認識は、親縁性の認識と、(少なくとも部分的には)重なり合う事になり、それはこの親縁性を持つ言語論的、認識論的射程を、そのまま受け継ぐことになるはずである。だがそこでは、かつては否定されていた類似性の概念が復活している。その差異は何であろうか。そしてそのことによって、非感性的類似性の認識に関して、どのような新たな可能性を得たのだろうか。次章では、その非感性的類似性の

概念について検討する。

第四章 「類似するものの教説」における非感性的類似性⁽¹⁵⁾

第一節 非感性的類似性

ベンヤミンの初期言語論においては神の言葉や純粹言語など、まだ神学的な用語が当然のように登場していた。しかし後年になると、ベンヤミンはそういったものを表に出さないようになって行く。それがベンヤミンの思考において神学的ないし神秘的なものからの離脱（転向）なのか、そうでないのかは議論の余地のあるところではある。⁽¹⁶⁾ 筆者はこれについて、根本的には神学的ないし神秘的な言語観は変わっていないという立場を取るが、本稿の結論は、それを裏付けるものともなるはずである。さて、その後期言語論において重要な位置を占めるのが模倣、そして類似性の概念である。このテーマについては、「模倣の能力について」およびその草稿である「類似するものの教説」という二つのテキストが存在する。「類似するものの教説」は「1900年代のベルリンの幼年時代 *Berliner Kindheit im neunzehnhundert*」の第一章を準備する中で定着されたという (*Gesammelte Briefe, Bd. IV: 163*)。その「類似するものの教説」を「言語一般」を参照しながら改稿したものが「模倣の能力について」となる。

なおこの「模倣の能力について」と「類似するものの教説」の改稿前後の異同だが、全体が凝縮された他に、後者で見られたオカルト的、神秘主義的な要素が削られていることが特徴的である。これは当時のベンヤミンのマルクス主義への接近から、意図的に削られたものと考えられ、それゆえに、後者の草稿段階の方がよりベンヤミンの本来の思考を反映していると考えられる。したがって、本稿では主にこの「類似するものの教説」の内容を見て行くことに

なる。

さて、「類似するものの教説」は以下のように始まる。

〈類似するもの〉の領域への理解 (Einsicht) は、オカルト的な知という広大な圏域の解明に、根本的な意義を
持っている。(II-1:204)

オカルト的、というのはそのままの意味で取っても良いのだが、ここでは特に人間の感覚的把握を超えたもの（すなわち、非感性的なもの）の事が想定されていると考えられる。何はともあれ、我々はこの一文で既に通常の思考圏からは吹き飛ばされて、ベンヤミンの（神秘主義的な）思考圏に立ち入ることになる。

そのような理解はしかし、直面した類似性を示すことにおいては、そのような類似性を生み出す過程の再現によってよりも、僅かにしか獲得できない。自然は類似性を生み出す。擬態のことを考えてみるだけで良い。類似性を生み出す最高度の能力を持っているのはしかし人間である。それどころか、人間の高度な機能のうち、決定的な形で模倣の能力がその規定に関与していないようなものはおそらくないだろう。(204)

ここで模倣の能力が言及される。この文章から、模倣の能力が、類似性を生み出す能力でもあることが分かる。この模倣の能力は系統発生的な、そして個体発生的な歴史を持つているというのだが、この後者については特に子どもの遊びのうちに、その発現が見られるという。そしてその対象は人間に限らない。「子どもは店の人や先生のみなら

ず、風車や電車をも演ずる「真似をして遊ぶ」(205)。だがこれはどのような意味を持っているのだろうか。それには、模倣の能力の系統発生的な意味の自覚が必要だと言う。

この意味を判断するためには、例えば今日我々が類似性の概念において把握しているものについて考えるだけでは、十分ではない。周知のように、かつて類似性の法則に支配されていたように見えた生活領域は、遥かに広大だった。「……」。今日の人々に関してもなお次のように主張され得る。今日の人々の中で類似性を意識的 (bewußt) に知覚する事例は、類似性が無意識的 (unbewußt) に規定されているあらゆる無数の事例のうち、ほんの一部でしかない。意識によって (mit Bewußtsein) 知覚される類似性は——例えば顔における類似性は——、数えきれない多くの無意識的に知覚された、または全く知覚されない類似性と比較すれば、巨大な氷山の海面下の塊の、海面から突き出て見えている、その小さな先端部との比較におけるのと同様である。(205)

ポイントは二つである。一つは、今日の人々が類似性の概念の下に理解するものは、かつてのそれに比べるとはるかに狭くなっているということ。これはつまり、人々の類似性を知覚する、または類似性を創造する(模倣の)能力が衰退していることを示している。もう一つは、一つ目の結果としてでもあるが、今日の人々にとって類似性の知覚は必ずしも意識的(意図的・自覚的)なものではなく、さらには、知覚されない類似性も存在するということである。とはいえ知覚し得ないのではそれを生かすことも出来ない。だからこそベンヤミンは、それが特定の瞬間にのみ可能になるような知覚について語るのだ。だが、これは後で触れることにしよう。

このような、かつては可能であったものの、今日の人々には知覚することの困難な類似性の例、つまりは模倣の能

力の衰退の歴史を示す例として、ベンヤミンは占星術を挙げている。

天空の事象は、かつて生きていた人々にとって、集団によっても個々人によっても、模倣可能であった。
(206)

星々の配置は集団ないし個人の運命（あるいは自然現象等）を示している、というのが占星術の発想であるが、そういうオカルト的な知の根拠になっているのが模倣の能力であり、つまりは類似性の知覚であるのだと言う。だがそのような類似性は、もはや今日の人々には知覚することは出来ない。しかしそれはかつて存在していたはずの、そして知覚し得ないながらも今も存在しているはずの類似性である。それが非感性的類似性と呼ばれるものである。

この非感性的類似性はまた、言語においても見いだされると言う。言語は、それが恣意的な記号体系でないのであれば（これはベンヤミンにとっては自明のことであったが）、その発生に関して、模倣の能力が関与していると認められてきた。その代表的なものが、言語は擬声語的なものであるという説明方法である。それは感性的な類似性のみ結び付けられていたために不完全な説明であった。しかし非感性的類似性の概念を導入することで、完全に透明なものになるのだと言う。そして、本稿の冒頭で引いた文章が現われる。

同じものを意味する、さまざまな言語の言葉を、その中心としてのあの意味されるものの周りに並べてみれば、それら全て——お互いにはしばしば全く類似性を持っていない——はそれらの（言葉の）中心におけるあの意味されるものに類似している、ということが明らかにされうるだろう。(207)

なお、この直後には親縁の語が現われてもいる。

そのような理解 (Auffassung) はもちろん、神秘主義的なまたは神学的な言語理論と極めて近く親縁 (verwandt) である。(207-208)

神秘主義的なまたは神学的な言語理論、という言葉でベンヤミンは自らの「言語一般」等で展開した言語理論を想定している、と考えることは間違っていないだろう。ここで親縁の語が現われるのは、「翻訳者の使命」での類似した記述がベンヤミンの意識を過つたからであろうか。

「言語一般」においては基本的に言語が音声的なものとして捉えられていたことは対照的に、「類似するものの理論」では、文字をもその思考圏に取り込む事で、その関係性の適応される範囲が拡張されている。

したがって、話されたものと意図されたもの間だけでなく、書かれたものと意図されたもの、そして同様に話されたものと書かれたものとの間に緊密な結びつきを作り出すものが、この非感性的類似性である。それもそのたびに全く新しい、独自の、導出不可能な方法で。(208)

ここでは意図されたもの (Gemeinte) という語が用いられ、「翻訳者の使命」との相同性がよりはっきりと表れている。そして話すことと書くことが、「異なる意図する仕方」であるのだと考えるならば、ここで述べられていることが、かつて親縁性の語で表現されていた、諸言語の間の最も内的な関係と同じものであることがいっそう明らかと

なる。また、この非感性的類似性の導出不可能性は、親縁性の本質が謎めいたものとされていたことにも対応するだろう。

ところで、言語の起源（言語の擬声語説というのは、結局のところ言語の起源を説明するための理論である）はこの非感性的類似性の概念によって説明される、ということであるから、名づけ（これは人間の言語の起源でもある）が親縁性に基づいていたことを想い起すならば、まさにこの非感性的類似性が名づけにおける親縁性の正体に他ならないことになる。ところで、親縁性は神の内におけるものとされていた。これに関して、人間の墮罪の歴史と、非感性的類似性を知覚する能力の衰弱（それはかつて知覚可能であった）の歴史を重ね合わせることができる。かつて人間は親縁性に基づいて名づけを行ったが、墮罪以後それは不完全なものになり、事物の過剰命名という事態を引き起こした（これは事物に正しい名が与えられていない事態でもある）。同様に、神に近かった時代に持っていた能力を失っていくことで、人間は事物の名を読み解く能力を失っていったのだ。しかし仮に不完全なものであったとしても、言語には必ずその親縁性ないしは非感性的類似性への予感が孕まれている。だからこそ、「文字は言語（音声言語）と並んで、非感性的類似の、非感性的照応（Korrespondenz）のアーカイブとなった」（208）のだ。¹⁷⁾

ということとは、ベンヤミンはこの非感性的類似性の概念の導入によって、神秘主義的な言語理論を世俗的な解釈へ（その神秘主義的な含意を残したまま）開いたと言うべきだろう。だからこそ、この非感性的類似性の概念を基礎とした言語の模倣理論（ここでは擬声語説）という、神秘主義的な言語理論と極めて近く親縁な見解は、「けれどもそのために経験的な言語学（Philologie）と疎遠であることなご」（208）と言われるのだ。これは実際、後の「言語社会学の諸問題」で身振り言語の導入という形で実践されている。

第二節 認識可能性

それにしても、非感性的類似性の、または非感性的類似性に基づく知覚は、いかにして可能なのだろうか。親縁性については啓示に頼らざるを得なかったのだが、この非感性的類似性の導入によってそこどのような可能性が開けたのだろうか。「類似するものの理論」から、以下の記述が示唆的である。

類似性の知覚は、いかなる場合においても閃きに結びついている。それはざっと過ぎ去り、おそらく取り戻されうるが、しかし他の知覚のように確保しておくことは本来できない。(206)

知覚する能力を失ってしまったとしても、なおある瞬間にはその知覚が可能であるというのである。この失われたものの回復の可能性は、実は後年の「歴史の概念について Über den Begriff der Geschichte」(1940)で過去の真のイメージの認識について述べられていることと一致する。⁽¹⁸⁾

過去の真のイメージは、ざっと過ぎ去る。二度と現われることなく、その認識可能性の瞬間にだけ閃く、ただそのようなイメージとしてのみ、過去は確保されうる。(Werke und Nachlaß=WN, Bd.19: 32)

「歴史の概念について」では、プルーストから着想を得た「想起 Erinnerung/Eingedenken」が、歴史認識の方法とされている。これは「無意志的想起」、つまり意志によらない、不意に訪れる「思い出し」である。これは具体的な

方法であるが、この方法を根底で支えているのが非感性的類似性の概念なのだと考えられる。というのも、この想起は忘れ去られたものか思い出される、という事態を表わしている訳だが、それが忘れ去られたものである以上、その思い出しが可能になる何らかの根拠がなければならぬ。それは今とその忘れ去られた過去との間に、この非感性的類似性が存在しているから、ということになるだろう。⁽¹⁹⁾更に言うと、類似性が親縁性を示し得たように、感性的類似性もまた、非感性的類似性を告知しうる（理解し難いかもしれないが、感性的類似性の内に、単なる感性的類似性を超えた対応関係、つまり非感性的類似性が見出されるということである）。紅茶に浸したマドレーヌによる想起。これは同じ行為の反復という（最初は当人も気付かなかった）感性的類似性に基づくものだが、明らかに単なる類似性以上のものを示している。紅茶に浸したマドレーヌは幸福な子供時代のイメージと、非感性的類似性によって分かち難く結びついているのだ。

非感性的類似性の概念について語った二つのテキストは共に公表されることになかったものであり、この概念が他のテキストで表立って現れてくることはない。だがこの概念を、かつて親縁性と呼ばれていた神秘主義的な概念から連続するものとして、後年の認識理論の根底に置いたとき、彼が言わんとしていたことがより明瞭に理解できるのではないだろうか。すなわち、非感性的類似性の認識可能性は、過去を解き放つ「かすかなメシア的な力」(Bd19:31)そのものなのだ。

おわりに

非感性的類似性の概念を作り上げることによって、ベンヤミンは認識可能性（認識可能なものの領域）を押し広げ

た。あくまで神学的、神秘主義的なものに留まる親縁性の概念に基づいた理論では、宗教的な啓示に頼るしかなかったのに対し、非感性的類似性は、類似性という、必ずしも宗教を前提としない概念に基づいて考察されるからだ。もつとも、その類似性に何を読み込むか、という点に焦点を絞れば、それは未だに親縁性が孕んでいた、神秘主義的な要素と袂を分かっているのではない。この親縁性から非感性的類似性への移行は、ある視点から見れば壮大な（神秘主義の、あるいは啓示の）客観化の試みでもあるが、同時に、主観性を突き抜けるようなある特異な経験の言語化とも言えるだろう。

〔注〕

- (一) 以下での引用は旧全集(Walter Benjamin: Gesammelte Schriften, unter Mitwirkung von Theodor W. Adorno und Gershom Scholem, hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1972-1989)より。引用時には巻数と頁数を記す。同一巻からの引用が続く場合は頁数のみ記す。なお「歴史の概念について」のみ、新全集(Walter Benjamin: Werke und Nachlaß, Kritische Gesamtausgabe Bd.19, Über den Begriff der Geschichte, hrsg. von Gérald Rauber, Frankfurt am Main/Berlin: Suhrkamp Verlag, 2010)から引用す。
- (二) (一)で親縁性と訳してゐる“Verwandschaft”の語は普通、「血縁関係」「親族関係」あるいは「血縁」「親族」といったことを意味する。人間の親族関係の他に、言語の親族関係(同じ言語から派生した諸言語間の関係)や、植物の類縁関係(遺伝子的な近さ、つまり進化前に同一種であったという関係)にも用いられている。この語の別の用法として化学物質間の「親和力」(ある特定の物質同士が結びつきやすいという傾向)の意味もある。なおベンヤミンの重要な批評「ゲーテの『親和力』」で扱われたゲーテの作品の原題は“Wahrvandtschaften”であるが、(一)に何らかの関連性が認められるのかどうかは、本稿では問わないことにする。

- (3) 例えば、「意図する meinen」という語ではなく「意味する bedeuten」という語が、また「同一 dasselb」の語ではなく「同じ gleich」の語が用いられている。初期言語論におけるこれらの語の使い分けに則って考えるとこの差異は大問題なのであるが、後に検討するように、ベンヤミンは結局同じ事態を述べているようである。
- (4) 邦訳「ベンヤミン・コレクシオン5」の該当箇所では、訳者（浅井健二郎）註で、「翻訳者の使命」での一部分（本稿での二つ目の引用文の周辺）が指示され、これらが「同じことを言っている」と指摘されている（「ベンヤミン・コレクシオン5」: 154）。
- (5) この「形式」の意味について「翻訳者の使命」の中では明瞭には語られないが、「ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念 *Der Begriff der Kunstkritik in der deutschen Romantik*」(1919)での形式概念と近いものだと考えられる。それは端的に言うところ、無限の媒質の中での自己限定 となる。またロマン派論との関係では、「批評可能性」と「翻訳可能性」との並行性も指摘できる。
- (6) *Dichtungen* (*Dichtung* の複数形) という語は、特にそれが複数形であるならば普通、文学作品と訳される。手元にある二つの邦訳は共にそう訳している。これを詩作と訳したのは、先に述べたように、原作において伝達の範疇の外にあるもの、その本質的なもの、つまり（詩的なもの *das Dichtersche*）を、翻訳者みずからが詩作することによって（*indem er auch dichtet*）、不完全に再現しようとする翻訳が否定されていたからである。ただし直後に「その言葉」とあるように、詩作すること、詩作されて作られたもの（文学作品）とを包含する概念だとも考えられる。しかしこの文脈の中で（原作と翻訳という関係にない、例えば、同一言語による）複数の文学作品の間の類似性について語られるのは不自然に思われるので、ここでは特に原作と翻訳との間の関係であることを強調する意図で「詩作」とした。なお、以下の箇所も参照のこと。「実際には、諸言語の親縁性は、表面的で定義できない二つの詩作 (*Dichtungen*) の類似性においてよりも、翻訳においてはるかに深く、明確に、証明される」(IV -1: 12)。
- (7) ということは、「志向 *Intention*」とは意図されるものと意図する仕方との総体のことだろう。
- (8) これは「意図されるもの」が増えることではない。ベンヤミンは後の部分で器の比喻を用いるが、ここでもそれを用いることが許されるなら、以下のように例えられるだろう。「パン」を十全に言い現わすある言語（純粋言語）は器としてイメージで

きる。それぞれの意図する仕方は、(ベンヤミンの比喩のように)この器の破片でもありうるが、ここではむしろある特定の方向から器を掴もうとする手だと考えれば良いだろう。そうすると、複数の手は、同じものを持ちながらしかし異なる部分に触れている。この触れている部分が「意味」である。意図する仕方が違えば意味は異なるが、しかし意図されるものはあくまで同一のものである。

(9) この「実体の類似性」について、三角形の例が出されるが、ここでは相同性が類似性の顕れとされており、読者を更なる混乱に誘う。ベンヤミン自身が、答えを用意出来ていなかったのだろう。その揺れ幅のゆえに、非感性的類似性という概念の生じる余地があったのだとも考えられるが。

(10) 正式な題は『海、オーケストラのための三つの交響的素描 *La Mer, trois esquisses symphoniques pour orchestra*』。それぞれに表題のついた三曲から成る。演奏時間は約二十三分。なお以下の『海』に関する記述については、(沼野 1999)を参照した。

(11) ドビュシー本人の言葉とのことだが、(沼野 1999:44)でも既に孫引きである。

(12) 実際、後期言語論においては現われない。しかし「ドイツ悲哀劇の根源 *Ursprung des deutschen Trauerspiels*」(1925)では、原聴取 *Urvornahmen* という言葉が事物の名を聞き取ることとして用いられている。

(13) ベンヤミンはこの論文の初めの方で言語的本質と精神的本質とを区別して「ある精神的本質にあつて伝達可能なものが、その言語的本質である」(42)とするのだが、後でこれらは同一のものと規定し直している。ここではあまり関係がないため詳しくは触れないが、ベンヤミンのこの論文に挑む者にとっては注意が必要な箇所である。

(14) この媒質の概念は、初期ベンヤミンの鍵概念であると同時に、解釈の難しい語でもある。この概念に着目してベンヤミンの思想全体を再構成した研究書として、森田園の『ベンヤミン——媒質の哲学』(2011)がある。

(15) 原題は『*Lehre vom Ähnlichen*』。様々な訳し方がされているが、本稿では「類似するものの教説」とした。教説 (*Lehre*) は「宗教的な教え」といった含みのある語であり、そのニュアンスを消したくなかったためである。非感性的類似性 *unsinnliche Ähnlichkeit* に関しては一般的な訳にならったが、(三島 1998)の「非感覚的な類似性」という訳のほうが、理解しやすいかもしれない。

(16) 例えは三原は転向と見てくる(三原 1995: 141-143)。一方で、ハーバーマスは、「ベンヤミンは生涯に渡って言語の模倣理論

を堅持した」(Habermas 1972: 202)と述べ、初期言語論と後期言語論を連続したものと捉えている。

- (17) ここでは一般的な照応の概念が念頭に置かれていると思われるが、ボードレールの万物照応 *correspondances* の概念との関連を認めることも出来る。非感性的類似性は、万物照応の経験が成立する前提だと言えよう。
- (18) イメージと非感性的類似性の関係については、(森田 2011)が詳しく検討している。もともと、森田は初期(前期)言語論と後期言語論とを特に名との関係について厳しく区別してはいるのだが。
- (19) この「想起」の概念には、「翻訳者の使命」で述べられたような「忘れえない」ものの残響を聞き取ることも出来るだろう。

〔参考文献〕

一次文献：

- Walter Benjamin: *Gesammelte Schriften*, unter Mitwirkung von Theodor W. Adorno und Gershom Scholem, hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser; Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1972-1989
- Walter Benjamin: *Werke und Nachlaß. Kritische Gesamtausgabe* Bd.19, Über den Begriff der Geschichte, hrsg. von Gerald Rauler, Frankfurt am Main/Berlin: Suhrkamp Verlag, 2010
- Walter Benjamin: *Gesammelte Briefe* Bd.IV, hrsg. von Christoph Gödde und Henri Lonitz, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1998

参照した邦訳は以下の通り：

- 『ベンヤミン・コレクション』1〜7巻、筑摩書房、1995-2014。
- 『ベンヤミン・アンソロジー』、山口裕之編訳、河出書房新社、2011。
- 鹿島徹、『新訳・評注』歴史の概念について』、未来社、2015

二次文献：

- Harbermas, Jürgen, "Bewußtmachende oder rettende Kritik - die Aktualität Walter Benjamins," Zur Aktualität Walter Benjamins, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1972, S.173-223 (邦訳:「意識化させる批評か」救出する批評か」好村富士彦監訳、『クンヤミンの肖像』、西田書店、1984所収)
- 楠木伸之 『クンヤミンの言語哲学』、平凡社、2014
- 細身和之 『クンヤミン「言語一般および人間の言語について」を読む』、岩波書店、2009
- 三島憲一 『クンヤミン 破壊・収集・記憶』、講談社、1998
- 三原弟平 『クンヤミンの使命』、河出書房新社、1995
- 森田團 『クンヤミン——媒質の哲学』、水声社、2011
- 沼野雄司 「C.ドビュッシーの《海》研究序説：第1曲を中心に」、『研究紀要』23、東京音楽大学、1999 (URL: <http://idr.nii.ac.jp/1300/00000788/>)

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

Kinship and Nonsensuous Similarity:
Reading Benjamin's Language Theory

Atsushi KAWAGUCHI

This paper investigates the relation as well as differences between Walter Benjamin's two concepts, kinship (Verwandtschaft) and nonsensuous similarity (unsinnliche Ähnlichkeit), mainly using the following four texts: *The Task of the Translator, Analogy and Kinship, On language as Such and on the Language of Man*, and *Doctrine of the Similar*.

According to Benjamin's earlier works is a relation that man could recognize; for example, relation between same-meaning words from different languages. The origin of kinship is grounded on God's words or the pure language. However, there is no practical way of recognizing this relation.

Nonsensuous similarity, according to Benjamin's later works, is a relation similar to Kinship i.e., a relation that man could recognize; for example, relation between same-meaning words from different languages. However, nonsensuous similarity includes the concept of similarity. This concept is not necessarily grounded on theological world view such as God's words anymore. Therefore, there is higher possibility for man to recognize this relation.